

地域における活用方法や発信の仕方を議論していくことで、「地理空間情報の輪」が様々な地域やスケールで展開していくことを願う。

(駒木伸比古)

神田孝治編：『観光の空間－視点とアプローチ』
ナカニシヤ出版，2009年10月発行，284p，2,900円（税別）

神田孝治編：『レジャーの空間－諸相とアプローチ』
ナカニシヤ出版，2009年10月刊行，270p，2,900円（税別）

姉妹本である両書には、地理学および社会学を中心として多様な学問分野の研究者が著者として参加している。この著者の多彩さから、編者のもつ幅広い「研究者ネットワーク」をうかがえる。『観光の空間－視点とアプローチ』は、これまでの観光関連の書籍において看過されていた「空間」の問題に焦点を当て、多様なアプローチを展開している。『レジャーの空間－諸相とアプローチ』も同様に、アプローチとしての「空間」をレジャーの諸相に対応させ、多彩な議論が展開されている。両書ともに、各章冒頭にわかりやすく表現された導入が、各章末尾に3段階の課題が設けられており、学生用テキストとしての使用が意識されている。以下、両書の内容を概観する。

まず、『観光の空間－視点とアプローチ』では、序章において、編者が「空間」という視点の整理、および各章の位置付け・解説を行っている。そして、観光について「空間」という視点から3部が編成され、各部に4つずつサブテーマが設けられ、さらにそれぞれのサブテーマに対して2つの章が配置されている。

Part 1「観光空間の形成と変容」については、まず「観光地の形成と交通機関の発達」をサブテ

マとして、交通機関の発達に加えて観光情報が観光地形成に重要な役割を果たしたことが示されている。1章（関戸明子）では草津温泉の変容と鉄道交通の整備との関係性、また2章（齋藤枝里子）では大阪商船の寄港地周辺の観光地化および瀬戸内遊覧の成立が論じられている。次の「観光地の創造」では、観光地の社会的な創造について論じている。3章（飯塚隆藤・加藤めぐみ）では、神戸市須磨寺遊園地が花見の場と化し、名所として成立する社会的な背景が探求され、4章（松井圭介）では長崎のキリシタン観光における行政とカトリック協会という二つの行為体の役割を考察している。また、「観光資源化と社会の変容」では、観光資源と社会的背景の関係性について論じている。5章（森 正人）では、イギリスのダラムの炭鉱産業が観光を通じて遺産として再評価され、そこから「地域」がイメージされた過程について、6章（妙木 忍）においては、客層の変化から秘宝館という性をテーマにした遊興空間の変容について考察している。最後に、「国際観光と地域」では、観光地化の地域インパクトについて検討されている。7章（横山 智）は、ラオスのヴァンヴィエンのバックパッカー地区形成による地域への社会経済的影響について論じ、8章（森本 泉）では、楽園イメージが投影されるネパールのカトマンドゥにおいて形成された観光業集中地区とそこでの住民向け消費文化の創出について述べられている。

Part 2「観光客の空間行動と情報・経験・イメージ」においては、はじめに「観光客の空間行動」が論じられている。9章（呉羽正昭・金 玉実）では日本における外国人観光客の特徴が、10章（佐藤大祐）では高度経済成長期の長崎県雲仙の外国人宿泊客の客層の変化が述べられている。次に観光行動との関係から「観光空間の情報」が検討されている。11章（金子直樹）では日本人の観光に影響を及ぼしたガイドブックの変遷について、12

章(岡本 健)ではインターネットを通じて創出されたアニメ聖地巡礼の特徴について考察している。さらに、「観光空間の経験」では紀行文の分析から観光の特徴を論じている。13章(滝波章弘)は多様な旅行雑誌の紀行文における観光の共通・相違点の要因を導出し、14章(橘 セツ)は19世紀後半の西欧人の日本旅行記から彼らの異なるスケールの風景の経験の仕方を考察している。そして、観光行動を生成する要因としての「観光空間のイメージ」について、15章(遠藤英樹)は観光地がメディアによるイメージに編まれることで形成されることを論じ、16章(森 正人)は、日本における「アジアリゾート」や「アジア雑貨」のイメージの生産・消費から観光の役割を考察している。

最後に、Part 3は「観光空間におけるコンフリクトと融和」に着目し、住民と観光客にとって異なる性質・機能を有する観光空間の在り方について議論している。まず、「遺産化と観光地化のコンフリクト」として世界遺産を取り上げ、17章(藤木庸介)が中国麗江市の観光開発に伴う地域の変容について、18章(才津祐美子)が白川郷の観光資源化のインパクトと文化遺産保護との関係性について検討している。次に、「ゲストとホストのイメージをめぐる対立」の問題について、沖縄を取り上げて議論している。19章(神田孝治)は戦前期における沖縄イメージの特徴およびこれに対する沖縄住民の反応について考察しており、20章(大城直樹)は、現代における沖縄の観光イメージに関する問題を様々な局面から検討している。さらに「自然をめぐるコンフリクトの諸相」を取り上げて、21章(フंक・カロリン)では、ブルーツーリズムの「空間」をめぐる様々な争いを論じ、22章(荒山正彦)は那覇市の国場川河口を取り上げ、マングローブと干潟という自然環境保全同士に生じた対立について議論している。最後に、「観

光と地域の融和」に焦点を当て、23章(堀野正人)は奈良町におけるまちづくりについて生活空間と観光空間の両者が融和・共存した様相とその要因を検討し、24章(松村嘉久)では「あいりん地区」の空間変容から、外国人個人旅行者の誘致の戦略および成果が論じられている。

次に、『レジャーの空間-諸相とアプローチ』は、まず序章において編者がレジャーの概念を整理し、レジャーの空間の特権について論じている。そして、『レジャー白書』に整理されているレジャーの諸相すなわちレジャーの部門分けから4つの部が構成され、それぞれの部に対して、「空間」についての3つのアプローチが設定され、アプローチごとに2つの章が設けられている。

まず、Part 1では、「スポーツの空間」について論じている。最初に「スポーツ空間の形成」に対するアプローチとして、1章(佐藤大祐)では、明治期以降の日本におけるヨットの伝播に重要な役割を果たした集団の特徴を、2章(井口 梓)では民宿経営の変遷から千葉県白子町におけるテニス民宿観光地の形成過程を検討している。次の「スポーツ空間の立地」では、3章(呉羽正昭)においてはスキー場立地の地域的特徴とその時代的変遷について、4章(坂井康広)では社会的背景の変遷からみた野球場の立地について述べられている。さらに、「スポーツ空間と文化」においては、5章(小長谷悠紀)では日本におけるサーフィンの文化史とメディアとしての空間の役割について、6章(神田孝治・杉本育美)では、社会的背景の変化からランニングとジェンダーの関係性の変容について議論している。

Part 2「趣味・創作の空間」においては、第1に、「趣味・創作空間の形成」として、7章(吉田道代)は「メイドカフェ」に焦点を当て「オタク」のレジャー空間としての秋葉原の特徴について、8章(山口 晋)は、ストリートをめぐる若者アーティ

ストの空間創造と都市の空間管理との関係について論じている。第2の「趣味・創作の空間と近代社会」の9章(長尾洋子)は、明治後期から大正期における越中おわら節を事例として、国や経済との関係の中から地域の芸能が生み出す空間について考察した研究である。また、10章(田保 顕)は、日中戦争中の戦場への芸人派遣実施の背景およびそれを見る・見せる経験について考察している。第3の「趣味・創作空間と地域」の関係については、11章(宮本結佳)で現代アートの空間の形成過程を様々な人々の相互関係に着目して検討し、12章(木村オリエ)では新たな社会関係を築く手段として男性退職者の地域サークル活動の参加を検討している。

Part 3「娯楽の空間」では、まず「娯楽空間の形成」が論じられている。13章(加藤政洋)は、近世から近代までの都市の娯楽としての「レンタル空間」の機能分化について論じた研究であり、14章(寄藤晶子)では公営ギャンブル場を中心に生成される社会空間について考察している。また、「娯楽空間のイメージ」について、15章(神田孝治)では、日本統治期の台湾の花街や遊郭の立地とイメージとの関係性が権力関係から検討され、16章(阿部亮吾)は「フィリピン」の神話や「フィリピン人女性」のイメージが埋め込まれた「フィリピン・パブ空間」の分析から、日本社会における東南アジア系女性に対するまなざし・欲望を考察している。そして、「娯楽の空間の管理」として、17章(青木隆浩)は明治期から大正期にかけて盛り場が多機能化によって混乱し、その解決のために青少年が排除される過程を論じ、18章(杉山和明)は、「出会い系メディア」の創出する空間への自主的/社会的な規制の相互媒介的な過程について検討している。

最後に、Part 4では「観光・行楽の空間」が取り上げられている。そこでは、まず「観光・行楽

空間の形成」として、19章(砂本文彦)では1930年代の国際観光政策による国際リゾート整備および日本における国際観光ルート設定について論じられ、20章(奥野一生)では日本におけるテーマパークの立地条件とその展開過程が検討されている。次に、「観光・行楽空間の変容」については、21章(須藤 廣)は日本人のハワイ旅行イメージと観光地が発信する観光空間のイメージの関係性をその変容から検討し、22章(内田忠賢)は日本の代表的なレジャーランドの社会的意味・背景を考察している。さらに、「観光・行楽空間におけるゲストとホスト」の関係性が論じられている。23章(荒山正彦)では、「旅行の記録」の分析を通して、戦前期における日本や日本人の植民地観光の空間について考察し、24章(上江洲 薫)では沖縄県の有料海水浴場の形成および隣接地域の開発過程が述べられている。

以上のように両書では、「空間」を中心に据えた多種多様なアプローチが、各章ごとに展開されている。多彩な内容であるために、見方を変えて時間的な視点を加えれば、本書は観光とレジャーの変容およびそれをめぐる当時の社会的背景を知ることが可能である。翻って、観光・レジャー研究における一貫した視点としての「空間」的アプローチの有用性を再確認することができた。この意味で、まとめとして終章が設けられ、観光・レジャーの「空間」に着目した成果として、新たな知見、課題および展望が提示されると、評者としてはありがたかった。しかし、両書ともに「空間」を焦点として多彩なアプローチを編みあげるといふ編者のねらいが十分に達成されている。本書は、観光地理学および観光社会学の分野にとどまらず、すべての観光学徒にとって、多様なアプローチを学ぶことができる格好の著書といえる。

(小島大輔)